

2020年11月8日 大井バプテスト教会 礼拝説教
説教題「種を蒔く人」マタイ13章1～9節

主任牧師 加藤 誠

「イエスはたとえを用いて彼らに多くのことを語られた。『種を蒔く人が種蒔きに出て行った』(マタイによる福音書13章3節)。

新共同訳では「種を蒔く人のたとえ」と小見出しがついている、有名なたとえ話である。けれども、ちょっと立ち止まって考えてみると、何とも不思議な種蒔きをする人だと思う。日本の農家の人は、このような大雑把な種蒔きをするだろうか。大切に耕した土に、種が一粒でも無駄にならないように丁寧に土の中に植えるのではないか。道端に落としたり、石だらけの土の少ないところや茨がたくさん生えているようなところに種をポロポロ落とすようでは農家失格ではないだろうか。

ところが、主イエスが生きておられた当時のパレスチナでは、このような種蒔きが行われていたという。何とも大胆な種蒔きである。ジャン・フランソワ・ミレーの描いた「種を蒔く人」という絵がある。夕暮れが迫る畑で、農夫が種の袋を抱えながら、右腕を振り回して種を蒔く、その力強い姿が印象的な絵だ。ミレーは農夫である父親を尊敬していて、父親をモデルに描いたと言われている。岩波書店のマークにもなっている絵である。

今朝は読んでいないが、10節以降と18節以降にはこのたとえ話の解説が書かれていて、「種」とは御言葉（神の語りかけ）であり、「種まく人」は主イエス御自身のことであると示されている。主イエスの「命の言」が、私たちの住む世界に、私たちの心に蒔かれていく時、その小さな一粒一粒の種がやがて芽を出し、成長し、豊かな実りを結んでいく。こうして私たちは主イエスの「命の言」によって神の豊かな救いにあずかるように、神が祈り願われていることを示されるのである。

ただ、そこで種が蒔かれる「四種類の土地」が示されている。その四つとは、①道ばた、②石の上、③茨の中、④良い土地である。18節以降の解説によれば、①道ばたとは「心が固く、御言葉を受け入れない人であり、せっかく蒔かれた種も奪い取られてしまう人」、②石の上とは「最初は喜んで、神の御言葉を聞くけれども、すぐに飽きて、根づかないうちに枯れてしまう人」、③茨の中とは「御言葉を聞くけれども、世の思い煩いや誘惑によって御言葉の成長が阻まれて、実りに至らない人」、最後に④良い土地とは「御言葉を聞いて悟る人で、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の豊かな実りを結ぶ」という。

そのために、このたとえ話を聞くと、「自分はこの四種類の土地のうち、どの土地だろうか。果たして良い土地になれているだろうか。茨がたくさん生えている土地のように、いろいろな誘惑に心惹かれて、ぜんぜん御言葉が成長していないなあ」

と反省を促されることになる。胸に手を当てると、ほんとうにそうだと、御言葉を聞いているのに、貧しい実りにしか至っていない自らの姿に、思い当たる部分があるわけである。

ただ、このたとえ話に「種を蒔く人のたとえ」と小見出しが付けられているように、「四種類の土地」よりも「種を蒔く人」にこそ、まず思いを向ける必要があると思う。というのは、ここで「種を蒔いている人」の姿こそ、主イエスの姿そのものだからである。実際このとき、主イエスがどんなに神の言葉を語っても、心を閉ざして決して聞こうとしない人、それどころか「この男は悪霊の頭だ」と非難し始めるような、まさに「道ばた」のような反応があったわけであり、主イエスこそ救世主だと喜んで従った人たちの熱狂も一時的なものにしかすぎず、十字架を前に主イエスが奇跡をすべて放棄されると、彼らは主イエスを見捨ててしまい、最後には弟子たちも迫害の嵐に恐れをなして姿を消してしまうという、まさに「石」や「茨」のような反応を見せていく。主イエスがこれほど大切な命の言を、それこそ命をかけて語っているにもかかわらず、「道ばた」や「石の上」や「茨の中」のような反応しか生まれえない。それが私たちの世界の姿。こんな連中にいくら神の大切な御言葉を語っても意味がない…と、絶望し諦めてしまっても不思議ではないのに、「種を蒔く人」である主イエスは、それでも私たちの中に「良い土地」の可能性を1パーセントでも、いや0.1パーセントでも見て、希望をもっておおらかに今日も、神の国の神の御言葉という「種」を蒔き続けてくださっている。その「種を蒔く人」こそが、このたとえ話の中心なのだ。

ミレーの『種蒔く人』にも「四つの土地」は出てこない。夕暮れ迫る畑で力強く種を蒔く「農夫」。種である御言葉の命と働きに大いに希望をもって力強く種を蒔いている「種蒔く人」。この「農夫」である「種蒔く人」こそ、主イエスの姿であり、主イエスがどのような祈りと希望をもって私たちの間で「種を蒔き続けておられるか」を、ミレーは信仰をもって描いたのである。

また、もう一つ興味深いことは、このたとえ話とその解説部分（1～23節）には「聞く」「聞いて悟る」という言葉が15回も繰り返されていることである。

「あなたは今日、主イエスの語りかけに心の窓を開いて、聞いていますか？」と聖書は問いかけているのだ。神は、私たちの能力や資格を問われないし、聖書に関する知識がどれだけあるかも問われない。ただ一つ望まれていることは、「今日、御言葉を聞いて受け入れること」。主イエスの語りかけに、心と体に向けていくことであり、今日、一つでも御言葉を生きることなのである。

詩編97編11～12節にこのような御言葉がある。「神に従う人には光を／心のまっすぐな人のためには喜びを／種蒔いてくださる。神に従う人よ、主にあって喜び祝え」。神が今日も、私たちの間に光と喜びの種を蒔いてくださっている。その主なる神を喜び祝い、賛美をささげていきたい。